

第1回地方創生会議 議事録（公開用）

日時：平成27年4月27日（月）13:30～15:45

場所：大台町役場 2階会議室

1 開会

辻本課長

本日は御多忙のところお集まりいただき、ありがとうございます。みなさまにはこの度、大台町地方創生会議の委員をお引き受けいただき、誠にありがとうございます。早速ですが、これより第1回大台町地方創生会議をはじめさせていただきます。私、本会議の事務局を担当します大台町企画課の辻本と申します。よろしくお願い致します。座って進めます。

最初に、尾上大台町長よりご挨拶申し上げます。

2 町長挨拶

尾上町長

みなさんこんにちは。今日は大台町地方創生会議ということで、お忙しところご出席いただきましてありがとうございます。大台町の人口ですが、合併した平成18年1月からみてみますと、1300人ほど減ってきておりまして、11300人あったんですが、9960人ほどに減少してきております。もともとでは、旧宮川村で昭和46年に過疎地域に指定をされて以来、人口が減少しつづけてきて、必然的に少子化・高齢化になってきている。現在も大台町全体で高齢化率が39%となっている。成人式を比較してみると、今年の成人式の対象者が102名、わたしが成人したおりに、旧宮川村、旧大台町含めて400名くらいいた。宮川だけでも150名いたので。ここ2～3年見てみると、生まれてくる子が平成24年度が54人、25年度が47人、26年度が45人と徐々に減少している。そのことが地域にとっては、保育園がそんなにいないのではないか、学校もいないのではないか、としてだんだん縮小になっていく中で、地域そのものが衰退していくという状況でございます。65才以上が半数を超える集落が全体50集落のうち10集落ほどございます。大台町としても重点地域として位置づけ、なんとかしていかなければ、と考えている。なかなか定住という状況にもなりにくい。わたしも若いときには外へでたかったんですけど、おやじが「外へ出たらあかん」ということで、本当は三重交通に行きたかったが、役場に入れてもらった。ただ多くは外へ出て就職して、そして戻ってこないという状況だ。しかしここにずっと住んでいると、自分たちの地域をなんとかしていかないかな、という思いは当然ありますし、もっともっとすばらしい地域にしていかないかなという思いを持っている。ここに

住むには、働く場が必要であり、しかしなかなか思うようにはいかないという現実にはさいなまれながら、毎日過ごしている。今回地方創生関連の法律もできてきて、いよいよこの対策を講じながら進めていく。大台町としても合併後、旧町村でのインフラ調整についてハードはほとんどできてきた。いよいよこれから、雇用と定住を確保しながら、結婚・出産・子育てについて対処していかなければならない。どうぞ皆様には忌憚のない意見を頂戴して、いい計画をつくりあげていきたい、と思っておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。現実にはなかなか厳しいが、なんとか打破して希望の持てるような地域づくりに邁進していきたく思っておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。ご挨拶といたします。

辻本課長

町長はここで退席いたします。

それでは、議題3に入りますが、ここで、中日新聞より取材の申込があったので認めましたことを報告いたします。

3 委員紹介

次に、委員のみなさまより自己紹介をいただきたくお願いいたします。この地方創生会議では、大台町職員の人材育成や各種事業で大変お世話になっております三重大学副学長の西村先生に座長をお引き受けいただけましたので、ご報告を申し上げます。ではここからは西村先生に進行をお願いいたします。

西村座長

みなさんこんにちは、三重大学の西村です。肩書きが邪魔して印象が違うといつも言われるのですが……。わたしは、旧南島町（南伊勢町）の出身で、外へ出た人間で二度と帰ってこないと思っていたのですが、たまたま縁があって三重大学へ帰ってきて、今社会連携を担当する副学長をしています。最初は大変だなあ、と思っていたが、昔は見えなかったものが見えてきて、可能性のある地域に変わってきているなと感じている。物事の見方の切り替えだけしっかりすれば、こういった地方、疲弊した地域ほど逆転してくんだと思っている。この会議の中でも可能性のあるものを導き出して、創生ですから、暗い雰囲気だめだだめだと言ってもはじまらないので、現状はこうだけど前を向いて、こうしていくんだという明るいものを、前向きな会議にしていいただければなと考えております。座長ではありますが、委員のみなさんの総意で決まっていくと思っておりますので、忌憚のない意見をいただきながら進行できればと思いますので、よろしくお願いします。

森山委員

この春から昴学園高校に着任した森山です。教員生活は 28 年目、平成 5 年から 18 年まで昴学園に勤務し、半分以上は旧宮川村で仕事をしてきました。この度ご縁があつて委員になりました。どうぞよろしく願いいたします。

山茸委員代理

名簿ではハローワーク松阪山茸が委員ですが、本日は代理で出席しております。松阪管内（松阪市と多気郡）の雇用情勢について、2 月発表の数字だが、求人倍率が 1.27 倍。1 月は 1.32 倍。26 年 2 月も 1.26 倍ということで、求人倍率としてアップしている。3 月末で定年や若い人でも辞める人が多い時期であり、4 月には求人倍率が下がる傾向にある。平成 26 年度、3 月卒業の学卒の就業状況について、求人数が 528 人あり、安定所を通じて、つまり学校を通じて就職をした人は 100%と全員就職できた。26 年度は製造業を中心に求人があつたが、今年度も期待したい。よろしく願いいたします。

末次委員

「すえなみ」と読みます。昨日は統一地方選後半戦の作業がありました。残念だったのが投票率で、三重県内では軒並み前を下回っており、こういった山村地域の人・土地・むらの空洞化が言われて久しいですが、いよいよ地方自治の空洞化がはじまっているのか。今回は地方創生を一番の争点にしなければいけなかったのに……。危機感を感じている。こうした場でいろいろ勉強もしたいと思う。よろしく願いいたします。

遠藤委員

大台町出身で、町内で 99 年から農業をはじめ、お米と野菜を作っている。よろしく願いいたします。

大松委員

商工会青年部より大松です。商工会青年部は若手 40 才までだったのが、人員不足で 45 才までとなった。わたしも 22 年目になった。この 22 年間青年部の中で地域に根ざして祭り等をしてきた。青年部の中でも今後の大台町はどうなっていくんだ、ということは 5 年くらいまえから言い出している。人が働ける、また関わる周辺の人々にお金を落としていただきたいというような循環型の事業を考えており、円やドルが変わったことで影響を受けるのではなく、小さくてもいいので自分たちの地域力をもって町の生活を支えていく、ということを経営部一丸となって進めている。

呉山委員

呉山コルクの呉山です。会社のパンフレットで自己紹介をしたい。コルクを取り扱う会

社で、ポルトガルから直輸入して、草履の芯材や他業種への材料を供給している。草履の芯材としてはシェアの9割を当社が占めている。当社創業60年以上、大台工場は1973年からで約42年経つが、材料からの一貫生産をしており重要な場所である。そして現在、大台工場で草履の完成品まで作っています。わたくしどもでも大台町での雇用の一翼を担えるようなことができればと思っているので、よろしくお願いします。

中条（ちゅうじょう）委員

百五銀行三瀬谷支店支店長の中条です。平成25年10月に着任し、はじめての支店長を拝命。地方創生元年ということで縁を感じている。最初の支店長赴任地は特に愛着がわくと聞いており、正に今その心境であり、なんとか大台町が盛り上がっていくように微力ではありますが頑張っています。今回の地方創生については、地域金融機関に与えられる役割も大きいということは当行全体の認識でもある。当行の本部に地方創生デスクを設置し、市町の指定金融機関となっている場合が多く県内の情報共有化もしており、他の市町の動きもわかるようになっている。こうした情報は共有していきたいので、よろしくお願いします。

小野委員

小野清美といいます。伊勢から嫁いできて24年になります。大台町内で0歳児から小学校6年生までの子どもに読み聞かせをはじめて14年になります。世間一般の主婦なので、こういう場でなにができるかわからないが、一般の町民の目線で話しができればと思っています。よろしくお願いします。

野田委員

野田綾子です。平成25年4月に愛知県豊田市から大台町に、旦那と2人で引っ越しをしてきた。大台町が好きで引っ越してきた。町内の家が気に入り、また自然が気に入り住みたいと引っ越してきた。2年間あっというまに過ぎた。今は大台町観光協会に勤めている。移住者という立場であるが、ここで仕事をして、旦那も林業に携わっている。どっぷりつかっているので、移住者ではあるが、町民の一人としてお話しができればと思っています。よろしくお願いします。

副町長

雇用と定住が大きな課題となっている。今回の地方創生の中で、大きな企業を呼んでくるのではなく、地域資源を活用したことができないかと考えている。移住についても空き家バンクなどで30数件が成立し60人以上の方が移住している。空き家がまだたくさんあるのだが貸してもらえないなどの問題もある。再調査して進めていきたい。いろいろな意見をいただきながら大台町のまちづくりを進めていきたい。よろしくお願いします。

事務局の紹介（企画課 岡本）。（一財）農村開発企画委員会の紹介。

4 事務局（企画課 岡本）説明

国の地方創生、大台町の地方創生、大台町地方創生会議、大台町の人口分析と将来推計について、説明。

5 意見交換

西村座長司会で進行。

意見交換のテーマとしては、「人口の将来展望と基本目標の考え方について」という大きなものです。数字だけみていると暗かったり、よくわからない。論点を絞りながら考えていきたい。例えば 2060 年、今から 45 年後の大台町がどうあったらいいのか、というのがどこかにないと、それに向かってどんなビジョンを、としても立たない。国が言っているように人口 1 億人をキープしたいから、大台町でも今 1 万人弱だから少なくとも 9 千人はキープしてくれと。ただ無目的に人口だけをキープするということをする、違うような気がする。一つの考え方として、2060 年の大台町はどうあるべきか、をそれぞれの立場から提言いただきたい。その上で、そのためには人口はどのくらいあったらよいか、雇用を増やすといってもどんな雇用を増やすのか、大企業を誘致して雇用を増やすか、中小企業をサポートするか、農業を振興するか、などいろいろな考え方が生まれてくると思う。

森山委員

（資料あり）大台町の人口が話題にでたので、中学校の卒業生数の推移について示したい。この 3 月の卒業生数が松阪管内で 1988 名、平成 31 年以降は全県的に減少していく。比較的生徒が多い北勢地域でもマイナスとなっている。平成 31 年には松阪では-238。40 名で 6 クラス規模に匹敵する生徒が減少する。再編が県でも話あわれている。2060 年について高校の視点からいうと、平成 22 年に宮川高校がおうか高校に統合された。宮川高校がなくなると同時に、高校の前にあったファミリーマートもなくなった。現在は尾鷲高校からおうか高校まで昴学園以外はない状況である。2060 年に大台町に来て住んでもらうためには高等学校はなくてはならない、病院・学校・働く場は絶対無くてはならないものである。現在も、地域おこし協力隊に協力いただいて昴学園の活性化プロジェクトをたちあげてもらっている。また当面、この 5 年くらいの間に生徒はどんどん減っていく。学校としては 2060 年などと悠長なことを考えている余裕はない。2060 年に学校が存続しているために、今も地域に根ざした学校ということで役場と一緒にいろいろしているが、抜本的な改革をする必要がある。そのためには、よそへ出て行かなくても、就職にしろ進学にしろすべてに対応できる夢のような学校かもしれないが、そういった学校を作っていないといけないと思っている。

西村座長

高等学校がなくなると、その地域は本当にだめになります。地域としての存在意義がなくなる可能性があるのですが、こういった地域には高校は残すべきと思う。ただ、三重大学でも問題になっているのだが、国立大学といえども今のまま存在していいのか、という議論もある。世の中に残るものは社会に必要とされるからである。必要とされないものは消えていくのは必然であることは認めなければならない。今なぜ県の南部で高校がなくなっているかという、高校の機能が昔のような機能を果たしていないのかもしれない、つまり、高度成長時のように普通科高校を作って、大学に行かしていい会社に入る、というどんどん社会が広がっているときの高校のあり方と、今のように社会が安定して継続しないといけない時代の高校のあり方が違うのかもしれない。ではこういった地域でどういう高校が求められるかという、地域密着をより鮮明にしていくことと、そのことが大台町の存続にも役に立つことだと思う。その地域の特徴を最大限だせるような高校になっていく。窓の外をみれば森林があるが、この森林を活かすことができるのはこの大台町が日本で一番かもしれない。アメリカのボーイングのあるワシントン州に行くのだが、あそこは航空機産業のために高校生・大学生を鍛えるというような教育ネットワークができあがっている。10校くらいのコミュニティカレッジという短期大学が、航空機産業に特化した学校となっている。これから5万人くらいの退職者が出てくるがそれを埋めることを目指している。規模は違うが、なぜここに昴学園がなければいけないのか、逆に昴学園があることによってこの地域が存続することができるのが重要である、と考えると、このあといろんな委員がお話しになる、大台町がどういう姿で2060年を迎えるのがよいのか、という住民の希望と照らし合わせることも必要になってくるのではないかと。そうするとはっきりとした策が見えてくると思う。

山葦委員代理

ハローワークの立場としては雇用創出として、雇用の場を設けて欲しい。ハローワーク松阪とハローワーク伊勢とで、奥伊勢就職面接会を開催している。大台町と大紀町や商工会と合同で。企業がたくさんあれば、学校を卒業した方も地域の残られるのがみえると思うし、若手だけではなく中高年でも働く場があれば、わざわざ松阪まで行かなくてもよい。理想的な話ではあるが。

西村座長

質問してもいいですか？仕事を探す傾向はどんなものでしょうか？大台町で働きたがるのか、松阪で働きたがるのか。

山葦委員代理

松阪は製造業の事業所が多く、一般的に製造業が人気の職種である。また全国的な傾向

として、人手不足職種として介護職や建設業関係は人手不足だが、製造業は人気職種というミスマッチがおこっている。

西村座長

転出していく人たちが毎年 60～70 名いるが、松阪・多気・津にも多い。ここから通勤できなくもない、という人たちが引っ越してしまうのはなんだろうな、と思う。これけっこう痛いのではないか。もしかしたら、子育て、小学校や中学校などの教育が町に出た方がよいと思っているのか、また職種によって 3 交代で通うのがしんどいので近隣でも出て行ってしまうのか。逆に、製造業の中小も人気なのであれば、大台に中小企業を誘致できないか。普通大企業を誘致することを考えるが、製造業で働きたい人がいるのであれば中小企業を誘致することや、また昂学園ではそういった仕様で教育をしていく、町全体で一体感を持って教育・企業の誘致を図ることも考えられる。いろいろな立ち位置において、この地域の人が希望していることと現実があっていないから転出が多い、だったらそれを防ぐ、希望を満たすことが人をここに留めるのであれば、一つの考え方の切り口になるかと思った。

末次委員

わたしたちの職業は、いろんな人が描いた絵を批評することは得意なのだが、自分たちでアイデアを出すことはきわめて苦手である。2060 年の大台町といわれてもピンとこないが……。18 から 24 歳の流出が著しいのはたしかに深刻な問題かもしれないが、この町から出て行ってより高い知識より高度な技術を身につけて、問題は帰ってこないことであって、こういった方々を受け入れる土壌を作る、それは企業かもしれないし別のものかもしれない。起業しやすい環境かもしれないし。これから取り組むべきことの一つと思う。人口問題については、わたしは入社してすぐ飛騨の高山に配属されたのだが、そのときにはすでに村では著しい過疎が始まっていた。消えていく集落もあった。それから 40 年近くたっても同じ問題を抱えていて、この問題が何年かですぐに解決するとは思えない。長期的に見ないとハードルは高いであろう。ましてや、大台町をはじめ各地ではこれまでいろいろな施策をしてきたがそれでも効果がでてきていないということは、できるだけ長いスパンで取り組む必要がある。移住について、移住の入り口だけを施策とするのではなく、それをいかに定住・永住につなげるか。この町に誇りを持たないと、他の人にも魅力に思わないだろう。人とのつながりがあり、空洞化していない地域が 2060 年にあればと思う。

西村座長

人とのつながりも重要で、それから、一番難しいのはそういった人たちも自立して生きていないといけない。自立している人たちが元気に横のネットワークを持っていたら、すごくいい町である。じゃあ、どうやって自立しているのか、というのはどこの町も解けて

いない可能性がある。ただ、行き着いたところは、底を打ち始めていると思う。人口減少していることをすごく深刻にとらえているけど、未来永劫人は減っていくのか、また人が減ることはなにか悪いことなのか、ということも考えなければいけない。人が増えることがよいの裏返しで考えているのかもしれない。経済成長しなければいけないと考えるからではないか。働く人を増やすためには、海外へものを売るためには効率をよくしないと行けないから、人を増やさないと行けない、いろいろな産業を均一に盛り上げないと行けないのである人口規模は必要になる。消費者も育成しないと行けない。となると人を増やすことは重要であった。これは経済成長をしていくときの考え方ではないか。経済成長のあとの成熟した段階では、同じやり方ではいけないのではないか。同じ人口を維持したらいいのか。もしくは減らしていったほうがいいのか。減らすという方法も策としてはあり得るのではないか。大台町で考えれば、農家の持っている平均農地面積は 2ha くらいだと思う。昔 2ha くらい農地があれば、お子さんを国立大学へ入れることができた。わたしはそうやって親父に国立大学に入れてもらった。学費は 10 万 8 千円だった。もっと前は 8 千円だった。そのころ 1 世帯当たり月に 2～3 万円は使えた。どんなに貧しくても、稼いだ金で子どもを育てられた。今は 2ha あって米をやっても 300 万円にもならないのではないか。三重大学に入れようと思ったら一年目ですべてなくなってしまふ。そうかんがえると、単位面積あたりに住める人の数は決まっているのかなとも思ってしまう。大台町として安定する場所、着地点があってそこを目指すこともできるのではないか。2060 年とはいわず、あと 20 年くらいかけて大台町が落ち着く姿、そこで再生ができる姿、が考えられるのではないか。そこには農業、採算のとれる農家を何人くらい雇用できるのだろうか、逆に計算できるのではないか。中小企業やサービス業の人たちも、その人口がいたら、どのくらいのサービス業が成り立つのか。今転出が 30 世帯あるのだったら、1 年に 1 社、松阪から中小でも製造業をよんできたら維持できるのではないか。そういったリアリティのある現実的な姿を逆算していくことも必要ではないか。落ち着く姿を見ることも「あり」なのではないか。

遠藤委員

専業の農家でして、農業で生活していきたいということでひっそりやっているが、けっこう難しい。個人的に自分のところはどうしたらよいか、は日々考えている。大台町は平野がないので、特にわたしは宮川でやっているの、山と川の中の少ない平地で住んで耕して生活している。今、専業農家を増やして増えるものかわからないが、大台町の農産物を販売する農家を増やしてやっていくのは難しいのではないか。今のところおすすめできない、おすすめできるように今やっているのだが、今の時点では自分でも答えがでない。町内で農業したい、という人がいたら、応援したりとか意見交換したりとかはある。山間部なので日照が少ないとか水が少ないとか家の問題とか。そういうことを克服した例というのは各地であると思うが、この地域でなにかできるか、というのは見つかって

いない。個人の考えであるが、国内で農家というと零細で、大規模な農家へ土地を集めている状況ではあるが、小さな農家、年寄りの小さな農家が自給的に作っている農家がたくさんいるというのも大事かと思っている。大台町としては、生活基盤としての収入源があって、家庭菜園プラスちょっと、くらの生活ができる町、と思った。

西村座長

非常に貴重な意見と思う。決して大規模農家を推奨するわけでもない。大規模農家でできることとできないことが絶対にある。できないこととしては、多品種をたくさんつくること。日本には多品種をつくる農家が必要と思う。ただ、農家の方々だけで全部を考えるのは無理だと思う。町をあげて、ここでこういうものをつくれればお金に換えてくれる仕組みをつくってくれるとよくて。このとなりにマックスバリュがあり、買い物しますよね。あそこで一年間にタマネギが何個売れているか、にんじんが売れているか、数えたことありますか？そのにんじんとかはどこから来ているのか。大台町ではない。この町の中だけでも野菜の実需がある、しかしその実需と生産者が結びついていない。もちろん全部はつくれないが、もしこの町の中で、農家がつくったじゃがいもをマックスバリュの真ん中で売ってくれれば。地物市とかをしても、スーパーはメインの棚はあけない。地物市をすれば、もしそこに農家のみなさんが持っていて今よりもたくさん売れば収入もあがるはず。なぜそれができないかという、一年間棚をあけてはいけないから。逆にいえば、それさえ克服できればよいのではないか。例えば、1年間といわず、5月から8月はかならず大台町の農家がじゃがいもをいれる、ということ誰かがしきってくれれば、町のみなさんが買ってくれる。ちょっとした発想の転換でできるかもしれない。実際に地域内流通をもう一度見直してみると、いろんなことができるのでないかと思って、鳥羽市で今、大きな実験をしている。鳥羽市が駅前に「鳥羽マルシェ」という直売所をつくった。JAと漁連が作った。ここにビュッフェがあって、毎日200人くらい食べに来る。そこで1年間のメニューを作ってもらった。そしてそのメニューには地元の野菜を使うと決めた。何ヶ月後になにが必要かがすべてわかる。それにあわせてJAの人がおばちゃんたち、家庭菜園をやっている人500軒くらいまわって、作ってくださいとお願いして、最初は品質もばらばらだったけど、半年くらいたつと、売れると気分がよくなるので、他の農家のものもみたりして、品質も全体としてあがってくる。このようにして町の中の人を食べることを誘発するだけでも農家が現金に換えることができる。それまではスーパーの端っこだったが。

こういうふうにして、大台町では、専業でも兼業でもいいので、100万、200万稼げる農家を100人つくっていく、それを誰が支えるのかということまずは町でささえましょうと。9000人住んでいるのであれば、基本的に大台町の人を食べるものは大台町のものを使う。それだけで100人が100万円稼げるかも知れない。それを束ねていけば専業農家もできるかもしれない。そうしたら若い人たちが農業をやるかもしれない。これもビジョンだと思う。2060年にはどんな農家がいるのか、その農家を町全体でどのように支えているのか。町全

体で考えていけば、なにか絵が描けるのではないか。農家の考えもあるかもしれないが、やる気があればできるかもしれない。三重県で捕れる魚の量と食べる魚の量は一緒なのだが、三重県でとれた魚の 8 割は出て行っている。何割かは戻ってきて、ちょっと古くなった三重県産として津で売っている。1 キロ 100 円で売られている津市の魚は、南伊勢町でとれたときの浜値は 20 円なんです。昔の流通だけをこれしかないんだ、と思い込んでいると誰も得しないという仕組みが残ってしまっている。であれば、大台町だけでまわしていく仕組みができれば、もっと住めるのではないか。

大松委員

2060 年を産業の面からみると、今でもみんな苦しい状態で先のことなど考えられるか、という状況。大台町の産業の歴史を考える必要もある。やはり林業が発展した宮川村と、栃原地区では昔の JR の保線区の人が多かったので、そういう方々がお住まいであり生活圏であった。自分たちのおやじの世代は企業として稼いだのであるが、事業承継の部分で今の 2 代目が本当の意味で自分のものにできているのか、大台町の中で本当に産業はあるのか。農業と林業に関しては、戦前から脈々と続いてきた産業なので、努力はもちろんいると思うが、今やっても人材は育ってくると思うが、今の大台町の人口と企業の背景からすると中小企業は成り立たないのが現状ではないか。これについては商工会でも心配ごととして話し合われてきており、事業承継については言ってきたつもりではあるが、ほとんどの方は失敗している状況である。お金の部分だけ承継しても、誇りとかなどはなにも承継できていない。そういった意味では、厳しい言い方をすると産業はないに等しいのではないかと思っている。ぼくたちの間で考える大台町の資源はなにかというと、山と水が考えられるが、そこにどのように産業を結びつけるかと考えた際に、間伐材を活用して林業を活性化しようと、本当はゼロベースでやりたかったのだが、みんなが集まってきたときに資金がない、ということになってしまったので。老人ホームとっているが正確に言うと地域力のあるアンチエイジングをしている。フィットネスやヨガなど。農業も、今実験段階ではあるが、大学をやめてきた 5 人に農業をしると、最初は抵抗があったが、今まで 1 年くらいつづけてやっている。そのかわり東京や大阪のうまい店には連れて行くぞと、そこで自分がつくった野菜を売る気持ちで板前さんと話をする、オーナーとも話をする、夢を持って話しをしる、と言っている。もうひとつは、大台町の落ち着いた姿については、もっともっと小さいコンパクトシティと考えている。昔の歴史を考えると、林業が発展したからあそこに人がいる、JR があったからあそこに人がいる、産業がなくなれば必然的に人がいなくなってしまっただけで当然です。商工会の立場からいうと、産業の核をしかりつくって、今から大台町なにをしていくのかがないと、もう一度練り直さないといけないと思っている。

西村座長

非常に明確だと思う。ちゃんと見ておかないといけない。雇用創出であっても中小企業

の活性化だとしても、移住にしても転出が多いのであれば転入を増やそう、全国一律で人口増やそうといっても、日本全体の人口が増えなければ市町の競争だけになってしまう。そんなことやっててなにになるの、ということではないか。やはり、最もここが落ち着くところで魅力的であったら勝手に人が増えるであろうしそうでないかもしれないけど。でも、正直ベースで大台町はこういうものだということを真剣に話し合わなければいけない。実は事前の打ち合わせの中で、人口 4000 人でいいじゃないか、むしろ 1 家族で 1000 万円くらい稼げるような町であれば、ここに住むのが魅力になる。さっきの農業の話になると、少なくとも今よりたくさん農地を使える農家が増える、そして町の中での実需ときちんと結びつけて、この中で 50 軒の農家は年収 1000 万円くらいになるよ、となると×4で 200 人くらいは住める。老人ホームでもいいと思う。都会から絶対に老人はあふれてくる、そういう人たちをここでしっかり受け入れるんだ、そしてその中にアンチエイジングだとか、森林浴、水が財産であるのなら、それを活かした観光でも保養所でもよい。大台町は徹底して個なんだ、ぴかっと光れば、日本中世界中から来ますよ。その成功のレベルは、東京に人を集めるほどはならない。例えば年間 1000 人来てくれればよいとか。目標設定、わたしたちの成功はなにかということを明確にたてていけばよい。大台にとっての成功と東京の成功とは違う。せつかく地方創生で戦略をたてることができるのであれば、やればよい。国の地方創生を見たのですが、馬鹿にするなと思った。穴埋め問題を解決させるようなものなんです。全国同じ物ができていく、そうじゃないんだということ。この国の基準を覆してもいいんです。大台は人口を減らしていてもいい、けどこのことで生き残っていくんだ、このことで繋いでいくんだ、というしっかりとした芯、これを住民の皆さんが納得してそれを信じながら皆さんがそれぞれの立ち位置でやっていくことが重要。

大松委員

老人ホームをやるときの一番のリスクは、三重大や日赤でも、病院からの距離であった。ただ老人ホームの横にヘリポートを作った。もしヘリが降りれることがあれば、「三重大の一番近くの老人ホーム」という売りができる。今、自分のリスクの部分、欠点の部分を真剣に見つめないといけない。いい情報だけみて、悪い情報はみないではダメ。欠点を伸ばしていくことが必要。

西村座長

そうしないとずぼずぼずぼと落ち込んでいく。立つために固まった土がなくなってしまう。自分たちの欠点も含めて冷静に見る、そしてはじめて自分で立てるようになる。しっかり落ち着いたらあとは上がるしかない。そういう作業が必要で、ならば落ち着く場所はなんでしょう、ということ。

呉山委員

当社は製造業で、社内での大台工場の位置はとても重要な役割をもっていると思ってい

る。当社はエコ素材コルク粒からいろいろな商材に製造・加工・商品化して販売している。主には、高級和装草履芯材（インソール）が多い。和装草履業界が縮小する傾向にある中、日本の和装伝統を支え、又、自社の発展のため努力した結果、国内シェア 9 割を占めるまでになった。

また、十数年前より将来を見据え部材だけでなく最終製品作りまで着手できる体制を整えてきた。以前は芯材（インソール）の販売のみで東京、京都、大阪、名古屋の職人が草履製品作りをしていたが、職人の高齢化により難しくなってきたところで当社に製品依頼が増加している。

今では、当社大台工場で作成するコルクが使用された草履が全国の百貨店、専門店で並んでいます。

今、草履芯材から製品作りまで一貫して生産している。多種草履・量産草履と業界の皆さんのご要望に応えるために生産体制を改善・整えること、そのための技術力・企画力・デザイン性が必要で、それぞれの人材が求められる。

対策としては従業員の適材適所への配置、人材の確保、養成、また作業工程の細分化を図り、誰でもできるような作業に改善をしているところです。

当社としても大台工場の労働環境に資金投入できる体制が整ってきた。

今後若い人たちに入社してもらうためにも、給与、働く環境も大事であり、何よりも“ものづくり”のメーカーとして魅力を感じてほしい。

皆の作ったものは全国のお店に並びお客様に届いていくという喜びと、誇りをもってほしい。おかげさまで人材に恵まれており、まだまだ一緒に働く仲間を増やしていきたい。我々は小さな企業ではあるが徐々に地域になくしてはならない“大台ブランド”、大台町の“ぞうりの里”として成長していきたい。そして“地方創生”の力になっていきたいし、当社に対しての理解と支援もお願いしたいと思います。

人口問題については、国レベルで減少していく中、大台町での人口減少は防ぎようがないのかもしれない。逆算式でスモール都市化していくことの必要もあるのでは。役場を中心として、分散している人口を集めて、そこにインフラ整備など限りある資金を充てていくことが魅力ある町づくりにつながっていくのではないかと。必要な人口の数、これくらいあればまわっていくんだ、というものをつくることも重要。一から町づくりを考える。必要な人数から分かることもあるかもしれない。

西村座長

企業城下町という言い方がよくないかもしれないが、昔は大企業が来ての城下町となっていた。ドイツでは、100万人住んでいる町は3つしかない。桑名市が14万人だったと思うが、ドイツにいくと50番目に大きな町になる。彼らはそれで企業城下町である。800くらいの市町がそれぞれ独立しながら生きていく。大台町は少し小さいかもしれないが、それも考え方であろう。草履の町でいいじゃないですか。コルクがとれるのは森林ですよ

ね。そういった点では大台の特徴を活かしていく、水と森、それに人がいて。呉山コルクが昴学園となにか、草履をつくる、またコルクを活かす、ということで、森林を活かす、ということで、森林に接している昴学園であれば、なにかコラボできないか。実際に多気町では、おうか高校では、まごの店もあったが、〇〇製薬と組んで化粧品をつくっている。最後まで製品をつくるというのでは、「河田フェザー」があって、羽毛を洗う明和町の会社なんです。日本のトップシェアで世界でもナンバー2なんです。羽毛布団は普通高級品を買いますが、あのほとんどは河田フェザーが作っている。つまり、羽毛を洗っている会社が最終製品まで作っている。今は、羽毛が足りなくなってきたリサイクルも始めている。古くなった羽毛布団は全部あそこに集められてもう1回洗い直して、出している。なぜここで事業を展開しているのかを聞いたら、鈴鹿山脈の伏流水が羽毛を洗うのに最適で、かつ乾燥した土地なので、ここ以上のよい土地は日本中探してもなかった、ということだ。つまり、この土地を最大に利用できる企業と組んで、そこを軸とした企業城下町という考えだ。そのような考えであれば、そんなに大きな企業でなくてよいと思う。ヨーロッパへ行けばそういった話が当たり前のようにある。北海道でも南富良野市では、エースのバックをつくる工場がある。なんであそこにあるのかわからないが、自然環境がよくて従業員がよいからかもしれない。大台でも呉山さんのところと組んで、雇用を生み出してとするのもよいのではないか。そういうことも含めてこの場でいろいろな話ができれば住民の皆さんにとっても非常によいことではないかと思う。

中条委員

銀行の立場から申しますと、お手伝いをする、コンサルティング機能を発揮するところである。人をとどめておく、流入を促すということになると、働く場、雇用の場がないと、どんな綺麗なことを言っても現実的にはむずかしい。では大台町にはなにがあるの、となると、資源を活かすしかないのかな、と思う。右肩上がりの時代なら会社を呼んでくるということもあったかもしれませんが、じゃあ今はなにができるかという、地元資源の活用しかない。即効性と費用対効果から考えても、それが一番。それがなにかを議論していくことが必要。東京のスケールを目指す必要はないわけで、またあれもこれもそれもできますよ、というのも無理。なにか1つに絞って極めていく、ここでしかないなにかに付加価値をつけて、せまいところをねらっていくのは現実的なのかなと思う。自分自身のことでは恐縮ですが、わたしは津の生まれで、東京の大学へ行って、Uターン組で、バブルでわきたっている都会を捨てて帰ってきた。なぜ帰ってきたかという、スローライフ、自然に恵まれているということは当時はあまりなかったが、今になってみると、あの都会の物にあふれているけどどこかむなし生活というか、そういう気持ちをもって田舎に帰ってきた。地元志向とか地元好きという言葉が最近はやっているが、なんでも人の集まっているところがいいのか、都会がいいのか、というと案外そうでもなくて、マイルドヤンキーという言葉が聞かれたことがあると思いますが、地元密着で半径20kmを出ない、という

若者が非常におおい。そういった時代背景も取り入れていきながら、求心力というか吸引力というかで出て行かない方法を考えだせないかなと思う。

西村座長

いろいろな国を見てきているが、成熟期に入るとそういう傾向がある。アメリカ人は海外でませんし。ヨーロッパはその最たるもの。それから即効性のものと、長期的なスパンでみる、を分けながら、ただしなにか一つのものに絞って集中していくのは重要。なににするが、またそれがだめになると大変なので、太みのあるものにするのも重要。もう一つ重要なのがプライド。ここに住んでいるというプライドが自分の中で持てない。やる気のある連中ばかりがでていくという気がしていた。わたしもそういうタイプでした。よく考えると、ここに誇りを感じて、ここで世界に通じる仕事ができるのであれば、ここにいたいと思う。今わたしは三重県に戻ってきてこういう仕事をしているが、昔は三重県でこういう仕事ができるなんて思わなかった。逆に今は、ここのほうがいい。ここのほうが世界と対等に仕事ができる。なぜかという、東京にいたらぼくは目立たないけど、三重ならば三重を代表して話ができる、ほとんど国家と同じレベルでものを考えられる、それで海外と対応したときの速度感ですよね、つまり三重県という特徴を最大限活かしていったら、代表者として国家間で話ができる。自分たちの場所の立ち位置を明確にすると、そこにいる人たちはプライドを持てる、つまり日本の中で大台町はどんな役割を果たしているかなんです。コルクや水や森林でもいいんです。日本の中の役割、世界の中の役割くらいでない誇りは持てないのではないかな。江戸時代はそうだった。300の藩がおらが国のものを持っていて、自分たちのコミュニティの中でプライドを持って生きていた。そういう時代があったと思う。これが成熟期の過ごし方の一つのモデルかもしれない。今豊かになった時代で、江戸時代のライフスタイルとは全然違うなかで、今の成熟期の日本のライフスタイルをつくれればいいのではないかな。そのためには大台町は日本の中でどういう役割として存在するのか、を定義づけてもいいのではないかな。そういう時期にきているのではないかな。

小野委員

何年前かに子育て中のお母さんに話しを聞く機会がありまして、また保育所の先生とも話しをする機会があって、保育所の先生が2才で保育所に預ける方が増えている、子どものおむつも保育所でとるんです、ときいた。わたしとしては、母親の仕事を放棄している、と受け止めた。お母さんたちに話したときに、子どもにはゆとりを持って接してあげてくださいね、しつけは家庭でするのが基本ですよ、子育てを楽しんでくださいね、と話をした。すると一部の母親から、小野さんの言うのはもっともだが理想論でしかない、と言われた。理想では食べていけないし、理想では子どもは育てられないし、子どもを家で育てるのが一番いいことはわかっているけど、外へ出て働かないといけない、といわれた。わ

たしとしては、子育て家庭が時間的にも金銭的にも余裕を持って子どもを大きくしていくことができるような2060年になっていたらいいな、と思う。プライドをもってとのことであつたが、子育てをするなら大台町、と全国へひろげれば、その印象を上手にアピールしていくことによって、たくさんの方がまちへ戻ってきてくれたりとか、全く縁故はなくてもこの町に住みたくなってくれたらよいのではと思う。

西村座長

貴重な意見だと思う。意外に田舎でも余裕がない。こういうところにきたらスローライフができると思って来たけど意外とできないということがある。なんでだろうと考えてみると、日本人が全部追い詰められていて、現金がないと生きていけないという感覚がどこかにあるのではないかな。なんでそうなんだろうと突き詰めていくと、大学って結構「肝」になっている。子どもを育てていくときに、教育をしてあげたい、と思うと1発目の壁が大学でくる。国立大学でも1年目に100万円かかる。子どもさんが2人いたら同時期に200万円用意しないといけない。その現金を考えたときにプレッシャーになってくる。これも避けては通れない現実なんです。だからここではなくて町へ出て行くとなる。より確実に三重大学に入れるためになどもあるかもわからない。そういうことも含めてなにが一番のストレスになっているのか、これを除くだけで生きてけるとか。一時期、鈴木知事に言ったのは、三重県民だったら三重大学をただにしろ、と言った。今、三重大学は運営費交付金を180億円くらいもらっている。県民ひとりあたりに1万円なんです。ひとり1万円払えば、三重大学はただでいける。三重県立大学にしてがんばったのは必ず三重大学に行けるよとか。もしそのストレスがなくなっただけで、どこでも住めるのではないかな、と思った。昔、年間8000円だったら、1ヶ月2万円しか現金がない家でも、なんとかできるよねということだった。なにかのストレスをみんなで解消することはやらなければならない。

小野委員

JRしかないので、朝一番の列車に乗せないと高校まで行けない、遠くなりすぎてもよくないし、金銭的にも時間的にも厳しい。

西村座長

2060年には昇学園が進学校にもなっているし、職業訓練もできるし、ということを目指せばいいのではないかな。この子ども達はここで世界に通じる子を育てる、という教育のキャッチフレーズにすればよい。そうなれば三重大学だってなくてもよい。人数が減ったからこそ英語の学習が成功しているのが御浜町ですよ。一人の英語が得意な先生が熱心に教えたなら、全国のトップレベルになってしまった。20人くらいしか生徒がいなかったから。人数が少ないことを有利にするやりかたもある。今外に出ている人で優秀なのを1~2人戻ってきて町のために貢献しろとって、すごいレベルの教育をしてくれると思う。それだけで変わっていく可能性がある。そういう点でなにが困っているかを明確にすることで、

解きやすいかもしれない。

野田委員

大台町って本当にいいところなんです。結婚して愛知県豊田市に7年間住んでいました。生まれ育ちは一宮です。結婚して7年豊田に住んで、ライフスタイルとしてそのときマンション暮らしだったのが、次の段階として一軒家がほしいと思っていた。本当は豊田市の職場に近いところでほしかったがすごく高かった。岐阜の田舎や愛知県の田舎を見て、空き家の中古物件を見に行っていた。それで三重まで来て、伊勢や鳥羽も。その中で大台町が自分たちにとってすごくいいところと感じて暮らし始めた。地域資源として「山と川」とポンと言える町ってそんなにないのではないかな。自分たちはすごくいいところと思って、他人にも薦めることができるが、少し違和感を感じるのが、近所のおじさんとかに、「なんでこんな田舎に来たんだ、なにもないのに」とすごく珍しがられる。「仕事はどうするんだ、林業なんて食べていけれんだろう」「前の職場に比べていくら安くなったんだ」とよく言われる。マイナスになったことあるけれども、それを考えても、大台町に住めるのはとても誇りに思っている。みなさんの話にも出てきたが、誇りとかプライドとかは絶対にキーワードだと思う。それがなんなのかと言ったときに、わたしたちは、まだ残されている自然環境であり、宮川村のほうではそれこそ田んぼのあぜ道でもすごく綺麗に草が刈ってある。本当に手が入っていて。人口が減っていて寂れた町というのは、空き家ばかり在って「本当に人住んでいるの」と寂しい感じなのですが、大杉の方に行ってもすごくきれいなんです。そういうところも地域資源の一つではないかと思う。一番言いたいのは、大台町はすごくいいところで、外から見てもそう思うということ。Iターン者として、わたしは空き家バンクを利用したわけではなく、松阪の不動産屋さんのホームページを見て、今の家を選んだ。その不動産屋さんいわく、今わたしの住んでいる地域（下真手）は宮川村の一番の入り口のところだが、下真手までしか不動産屋さんは扱わない、奥に行けば行くほどお客さんが来ないので、空き家はたくさんあるんだけど、とのことであった。奥にももっといいところがあるのに、それをインターネットに載せないことで知る人が少ないのはもったいないのではと思う。自分が実際住んでみて、空き家貸してくれるの？と聞いてみると、貸してくれる。知っている人には貸すということがある。知らない人には貸さないという閉鎖的なところがあるので、移住者としては空き家をもう少し効率的に貸せるような体制を作れるといいのかなと思う。もう一つ、今観光に携わっているが、観光もすごく大きな産業になると思っています。まだ素人だが、人口が減っていくことはしょうがないことだが、減った分を少しでも観光客がお土産を買ってくれたりだとか、体験をしていってくれたりだとか、そういうことで少しでも補えるのではないかな。例えばアウトドアの体験をする際に、地元の人がガイドをする、昴高校にアウトドア科があったりして、山登りの専門だったり、でいろんなところがつながって行って。アウトドアの靴を呉山コルクさんのコルクを使ったり。こうやってつながっていくことで観光だけでなく、まちづくり

だったり、Uターン者を呼び戻す、Iターン者を引きつける、こともできるのではないかな。今、従業員わずか3名だが、すごい可能性のある産業と思っている。

西村座長

地元の人たちから見える大台と、外から来た人から見える大台はちがう、というのはみんなそんな感じである。同じようなことで、過去の定義と今の定義が違はずなんです。つまり、今の時代にあった生き方が本当はあるはずなんです。でもそれを考えないで、昔の生き方でもう一回ここを見る、ここでの生活を考えるから、子どもは大学にいかさなければいけない、そのためにお金を稼がないといけない、とせまられるし。ライフスタイルそのものが肩肘張っていませんか、ということ。今日本人が、ひとつの会社で、1カ所に住んで、そういう場所でないと生きていけないんだという先入観がすごくあって、そうではなくて、日本ではこんな新しい生き方ができますよ、というものを大台町で作ってあげば。農業の話で言えば、農業一本で生きていなくてもいいし、役場一本、工場一本でなくてもいいし、それぞれのやり方で、週3日は工場で働いて、週2日は農業をして、収入もここで生きるのならこれくらいで全然問題ないよ、というものが設定できるのであれば。生き方ってもっと楽だと思います。自分たちの中の先入観で「こうでなきゃいけない」とか、恥ずかしいと思っていて、そういうものを勝手に作っている可能性がある。そのさいたるものが、こんな田舎に住んでいてなんてだめなんだろう、ということもここに住んでいるひとたちが思ってしまう。考えてみると、ここに住んでいるひとたちの生活というのは、都会の人に比べたらものすごく豊かかもしれない。金銭面では少ないかもしれないが、実際に使えるお金は豊かかもしれない。東京で年収1000万円なら惨めな生活です。まともな家に住めないし、駐車場代も払えないとか。ここで500万円なら東京の1000万円より飯生活ができるかもしれない。こんなことを含めて考えて、もう一度ライフスタイルを自分たちで作っていくというのもよいのではないかな。逆に移住者から見れば、ものすごくいいヒントがあるのではないかなと思って聞いていました。

時間をだいぶオーバーしてしまいましたが、なにか言い足りないことがあったら……。
副町長いかがでしょうか？

副町長

こういう会議は久しぶりで、いろいろなご意見をいただきまして、ありがとうございます。この内容を受けて、具体的な施策を作っていかなければいけない、ということで、先生が言われたように、どういう町をつくっていくのか、プライドが必要ではないかなとか、いただいたそれぞれの言葉を軸にしなが、職員とともに具体的な戦略を組み立てていきたいと考えています。

林業大学校のこちらに誘致できないか、ということはやっている。これは昴学園高校と

林業大学校をコラボしていくということ。

子育てについて、小さい子どもを育てるには、待機児童もないし、保育料も一番安いし、子育て支援センターも充実しているということで力を入れている。ただ、全国発信をしていない。そのあたりは課題である。野菜では、地域の中でできたものを地域で食べるという議論も進めているところである。道の駅を中心にしてできないか検討中である。一つネックになっているのは、専業主婦の方はいつでも行けるのですが、共働きの方は仕事のあとしか行けないのですが、道の駅は閉まっていますし、野菜がありません。これも課題である。また産業の核はやっぱり必要だと思いますので、これからもいろいろな形で御協力いただきたいと思います。

西村座長

みなさんから、それぞれのよいご意見をいただけたのではないかと、思っている。

辻本課長

本日は貴重なご意見ありがとうございました。次回の会議では、本日いただいた意見を踏まえて、大台町の将来展望について庁内でも検討した上で、2回目の会議で再度ご意見をいただきたいと思いますと考えている。次回の会議は、5月25日（月）13:30から開催したい。お忙しいとは存じますが、ご出席をお願いします。本日はありがとうございました。